

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと云々。

## 第8章 行者を生み出す法が

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

### 念仏である

text by Kouyou Kanaishi

宗祖の著作には、「行者」という言葉が数多く用いられている。この第八章も含めて、『歎異抄』には、八回にわたり「行者」が出てくる。今回は、宗祖の語る「行者」の内容を確かめることを通して、第八章のお心を尋ねていきたい。

一般に行者といえは、修行者を指す。仏道を修行する人、仏果を得るため、様々な修行と善根を修める人という意味となる。その限り、行者の行とは、どれ程勝れているように見えても、諸善万行という人間の諸行為・実践 (an act/action・practice) の一つでしかない。しかし、人間と如来には分限がある。その事実を、「念仏は行者のために、非行非善なり」と、宗祖は語られる。念仏は、「行に非ず・善に非ず」というのは、人間のはからい、能力・努力という人間関心の延長線上に如来はいないということである。人間と如来との絶対断絶。人間から如来への架け橋は一切なし。それが、完全否定語である「非」という一字のもつ大切な意味である。

ここに、法蔵菩薩の発願の根拠がある。『無量寿経』には、本願の正機として、如来の智慧の眼に凝視された人間の実相を「凡小」「貧苦」「詳萌」として語られてある。宗祖にとって、その経言を身をもって領かれたのは、流罪による、「いなかのひとびと」との出遇いであった。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」(第十三章)という人間の实相。宗祖が「われら」と呼ばれ

た、わずかな善も行も積むことさえできない人々と共に救われる道でなければ、仏道とはいえない。本当の救いは、どこにあるのか。

鈴木大拙師は、英訳『教行信証』において、念仏なる「行」を (the true living of the pure land) 「浄土真実の生活」・ (the great living) 「大いなる生活」と訳された。

その意味では、宗祖が語る「行者」とは、単なる修行者ではない。「行」とは、人間の行為・実践ではなく、生活そのものである。その「行」は、「大行」(如来の行) である限り、「行者」とは、「念仏申す者」ではなく、「念仏申さるる者」(第十六章) のことである。果てしない苦海に沈んでいるわが身が、無上涅槃からの如来の呼びかけである念仏に目覚め、已にして、如来大悲の中にある自己自身に出遇うことのできた懺悔と讃嘆をもって日々を生きる者、「本願の生活者 (安田理深師)」である。

平野修師は、亡くなられる直前に、現代のもつ課題を、「人間が消える・消す・消される」という言葉で発信された。戦前の「滅私奉公」(私心・私情を滅し、国家につかえる) も、今は巨大な社会機構の中で一歯車となり人間が消え、戦争のみならず、自殺・差別・いじめによって、人間が消え、消されている。完全な自己喪失である。あるのは、自我だけ。

天親菩薩は、『浄土論』冒頭に「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と本願に目覚めることのできた感動を表白された。本願に目覚めるとは、本願の中に、自己が消えていくことではない。まして、「我一心」とは、我があって一心を起こすのではない。本願成就の「一心」において成立する「我」こそ、真の自己・信仰主体の誕生である。「我一心」こそ、宗祖の語る「行者」ではなかろうか。

「大行」である念仏の法とは、釈尊を仏陀たらしめた法そのものであり、無数の「行者」を生み出してきた背景・根源であり、この私にまで届けられた「大行」の伝灯・歴史であるといえよう。